

多摩大学非公認マスコットキャラクター「ほーくん」誕生！多摩祭デビュー！！

梅澤佳子ゼミ プロジェクトメンバー 経営情報学部3年 芹澤 誠 阿部 智大 小島 拓哉

1. なぜこのプロジェクトが始まったのか

「多摩大学には校章があるが、マスコットキャラクターがない！」このことに、私たちは強い問題意識を持ちました。多摩大学は学生自らが動く大学であり、2014年度が開学25周年であることから2013年5月に梅澤ゼミ「多摩大学マスコットキャラクターをつくらう」プロジェクトを立ち上げました。

マスコットキャラクターは、多摩大学の様々なグッズを飾り、着ぐるみで新入生や留学生の歓迎会、学園祭など学校行事、体育会フットサル部の応援、入試広報活動等の雰囲気をも盛り上げたい。また、地域の皆様にも愛され、多摩地域の祭りやイベントへの参加要請が来るような存在にしたいと考えました。マスコットキャラクターが地域で活躍することで多摩大学が広く知れわたり、地域の皆様に認知されることも目的として活動を開始しました。



寺島実郎学長とキャラクターをデザインした白石さん、井上さん

2. マスコットキャラクター「ほーくん」決定までの道のり

2013年夏、私たちはマスコットキャラクターの制作にあたって多摩大学（経営情報学部、グローバルスタディーズ学部）及び附属聖ヶ丘中学高等学校、多摩大学目黒中学校・高等学校の全学生（生徒）、全教職員を対象にマスコットキャラクターのデザイン案を募集しました。その結果、経営情報学部学生教職員より12件、聖ヶ丘中高より1件、合計13件の作品が集まりました。

キャラクターの選考過程には、出来るだけ多くの学生に参加してもらいたいと思い、必修科目、受講者が多い授業の先生にご協力をいただきアンケートを実施しました。予備調査を行い、予選、本選の結果、経営情報学部2年井上路華さん、白石一偉さんの作品「ほーくん」に決定しました。多摩祭に向けてほーくんのパネルを製作し、現在は、学生課と教育サポート室に展示させていただいています。



3. ほーくんの物語

ほーくんは、多摩大学の校章のエンブレムにある鷹の羽から鷹をマスコット化しました。全体にかわいいイメージではありますが鷹の印象をつける為、目を少し吊り上げています。また、大学カラー「紺青」を全面に出すため青を基調にデザインし、マフラーには多摩大学の校章を入れました。その他にフットサル部コスチューム、キティコスチューム、スーツコスチュームバージョンがあります。

非公認マスコットキャラクターほーくんは、高い志を持ち、鋭い眼差しで未来を見据え、課題解決に挑む多摩大のスピリットを体現したものです。経営情報学部を越えて多くの学生（生徒）、教職員に愛される非公認キャラクターを目指します。どうぞよろしくお願いいたします。



フットサル部コスチューム ハロキーティコスチューム 正装コスチューム

メディア実践論の制作現場から

白石一偉が行く！多摩の自然探訪 ～紅葉の多摩、感動の秋を歩く～

経営情報学部 2年 白石 一偉

君は多摩の秋を見たか！?

その息をのむような紅葉の美しさを感じたことがあるか！?

春夏秋冬、多摩の自然はどの季節も美しい。だが、美しいだけではなく、感動するような風景は秋のほんの一瞬にしかない、撮影を通して私は思った。多摩の秋をビデオカメラで追っていく過程で「生命の世代」が変わっていく様子や、緑から黄色、紅色へ、さらに深い朱色へと変化していく絶妙な紅葉の景色を見た。景色だけではない。虫たちの鳴き声や散り敷く落ち葉の上に降るどんぐりのかすかな音など、音でも秋を深く感じることができる。これらを全身で感じなければ、多摩の自然を、秋を満喫したとはいえないと気づいた。

「テレビをつけたら、番組はすべて教材になる」そう、木村先生はおっしゃっていた。春学期のあるひとコマの教室でのことだ。私は春学期からこのプロジェクトゼミに参加した。「メディア実践論」では、音声や映像、活字といった様々な媒体＝メディアとどう向き合い、どう活用していくのかを学んできたが、私はその中で、ビデオカメラによる映像作品を作りたいと思った。そして「番組は教材」だといわれたことが大きなきっかけになって、テレビの自然番組を見ていたとき、私の中に美しい自然を撮ってみたいという思いが生まれた。自然を撮ることがこんな感動をもたらすのかという驚きと共に。

初めての撮影は、8月の半ばすぎ。夏の暑いさなか、広い公園を一回りして生物や風景を撮ってみた。結果から言うと、満足のいく撮影はできなかった。それは、木々の葉や水辺などにばかり注目して撮っていたからだ。足元や周りの音というものに対してまったく注意を払っておらず、編集している際に、もっと音に対して気を配って撮影しておけばよかったと後悔した。ただ後悔をただけではなく、カメラを持って歩くときの姿勢やカメラを構える視点を変えてみる方法、じっとすることで聞こえてくるかすかな虫の鳴き声を聞き取る術など、多くの気づきと学びがあった。

「夏の後悔と学び」をバネにして、秋も深まりを見せはじめた10月上旬、同じ場所へ今度は紅葉をテーマに、撮影に出かけた。秋の公園はまだ紅色になりきれない青葉や緑から黄色に変わりはじめた葉、黄色く紅葉がすすみはらはらと地面へと散っていく落ち葉、その落ち葉の辺りで聞こえてくるコオロギをはじめとした虫たちの鳴き声、そして空から落ちてくる成熟したどんぐりの音など、前回の時に気づかず見落としていた光景や「音の風景」を撮ることができた。夏に撮ったものより格段によく撮影できたのではないかと、少し自信が芽生えた。

今回は秋の多摩の自然を写し取るチャレンジであった。まだロケをしたのは二回だが、自然を撮ることは本当に難しいと、痛感する。このあと、映像の編集を通して見直しつつ、どうすれば自然の魅力や美しさを表現できるのかを考えていきたい。そして冬や春という季節も撮影して、多摩の自然の魅力を探し、伝える「旅」を続けたいと考えている。



落ちてきたどんぐりにも秋の顔が



緑に深紅のもみじが映えて息をのむ

多摩・出会い、ふれあい各駅停車 ～小さな乗換駅にふれあいを求めて～

経営情報学部 4年 古西 政樹

駅は出会いの場であり行き交う人のふれあいのドラマがあるはずだ。それを見つけてみたい。鉄道好きの私がこの「メディア実践論」で「駅」をテーマにした理由だ。

教室でそう発表したところ作品のタイトルという問いに遭遇した。う～ん、と唸っているうち「シリーズ・各駅停車」だよなという声。すると「出会い、ふれあい各駅停車」はどうかと。そうだ！「多摩・出会い、ふれあい各駅停車」でいこうとなった。

うん？しかし、ふれあいを見つける？考えれば考えるほどむずかしいと思うのだった。先生は、動け、現場に立て、駅に行け！と毎週はっぱをかけてくる。悩む私！

考えあぐねたすえ、都内のとある駅に向かうことにした。

東急世田谷線。京王線・下高井戸駅と東急田園都市線・三軒茶屋駅間を住宅の間を縫うようにして走る路線だ。その途中駅、山下駅で下車することにした。ここは乗換駅でもある。およそ50メートルで小田急線・豪徳寺駅と接続している。駅名が違うので離れているようなイメージがあるが、そんなことはない。南武線と京王相模原線の稲田堤駅の乗換えよりも断然近い。

しかし、この山下駅は世田谷区にある。タイトルの「多摩」とどうつながるのか。そのとき、私の頭をよぎったのは、インターゼミ（社会学研究会）で取り組んだワークのキーワードにあった「三多摩」だった。明治時代、多摩は南多摩郡・北多摩郡・西多摩郡があったが、当時の三多摩はいまよりずっと広く、現在の世田谷区の一部は北多摩郡に属していた。山下駅のある地域も「多摩」といえると思いついた。

そんな多摩の隅っこにある、小さな駅の前には商店街がある。歩いてみると、ここでも多くの店はシャッターが下りていた。しばらく歩いて気づいた。営業している店も明かりは点いているのに、店内に人影がなかったりする。私が想い描いている活気のある商店街は多くが開放的な店であるが、ここでは扉が閉まっている。出入りが容易な店構え、店の主人と客が和気あいあいやり取りをして活気に満ちている、それが駅前商店街というものだ。しかし、ここにはそれがなかった。地域に住む人たちのふれあいの場のひとつであるはずの商店街がそうはなっていなかった。出会いとふれあいを求めて降り立った場所で、ふれあいがないとどかないという「現在」を見つける結果となってしまった。なんともモヤモヤしたものが残ってやりきれなかった。

帰り道、下高井戸駅まで沿線を歩いた。その途中、珍しく球技のできる公園を見つけた。キャッチボールをする子供、サッカー教室で駆ける子供、大勢の子供たちの歓声であふれていた。それを見ながら会話に熱中するお母さんたち。ロケで目指したものは空振りに終わったが、この公園で見つけた「ふれあいの光景」が救いだった。ふれあいのカタチは人の数だけ多様にあるものだった。しかし、「出会い、ふれあい各駅停車」制作の「終着駅」はまだまだ遠い。

現場に立て、駅に立ってじっと見つめてみる！先生の声が耳の奥に響く。今日も悩む古西だ。



ひっそりとした駅前商店街



左・山下駅、右・豪徳寺駅、乗り換えもすぐ

留学を通して得たもの その留学経験が与えた影響と将来

グローバルスタディーズ学部 4年 又吉 雄一

留学は、3年生の後期から4年の前期の約1年間、アメリカのジョージア州立バルドスタ大学に留学しました。留学を決意した理由は、将来は英語を使って海外で働きたい、そのためには英語力も向上させたいという簡単な理由でした。留学の前には2年生の冬から長期休みの際には海外旅行を行うと決めて東南アジアを中心に旅行を行っていましたので、行く前の不安はありませんでしたが、アメリカに来てみると、予想していた以上に人、家、土地などすべてが大きいことに驚きました。留学の前半では、私の英語力不足でアメリカ人が言っていることが理解できず、私は猿のようでした。何を言われても、okなど簡単な英語での一つ返事をしていて、しっかりコミュニケーションをとれるようになるのか不安を強く感じていました。私が行った英語を上達させるための努力として、まずは多くの人と知り合って、多くのコミュニティに参加してアメリカでの自分の居場所を作ろうと努力しました。4人部屋の学生寮で生活をしていたので、毎日ルームメイトと食事をしたり、雑談したり、つたない英語ではあるが一生懸命会話をしました。同じ寮内で行われているパーティーやイベント事に積極的に参加して人脈を広げました。ルームメイトとの生活で特に印象に残っていることは、韓国人のルームメイトとの食事です。韓国人のルームメイトは毎日の夕食の際、友達をいっぱい呼んで一緒にご飯を食べていました。でも、彼はお金がないと困った顔でお金の計算する姿を私は度々目にする機会がありました。ある日、私は彼に“なんでお金がないのに、みんなの分までご飯を作って一緒に食べるの？”と質問をしました。そうしたら彼はこう答えました。“1袋のラーメンを1人で食べたらお腹はいっぱいになるが、1杯のラーメンを友達とみんなで食べたら、お腹いっぱいにはならないけど、心は満たされる。”と教えてくれました。アメリカの生活で感じたことは、大切なのは自立することでした。アメリカの生活になれて、アメリカに感化されることはいい事だけれども、私が日本人として培ってきた考え方も良いものだということを思い起こさせてくれました。文化に優劣はなく、どの文化、考え方もいいということを肌で感じる事ができたいい体験でした。韓国人のルームメイトとは留学が終わった今も尚連絡を取り合う中で、今後も大切にしていきたい友達の1人になりました。

大学の授業では英語と政治を中心に受講しました。アメリカの授業で感じたことは、日本の授業のシステムとアメリカの授業システムが大きく違うことです。アメリカの授業では知識、考えをoutputする場になっていました。アメリカの学生は予習、復習

に時間をかけて、自分の考えをしっかりと構築し、授業に臨んでいました。そのため学生は積極的に発言し、毎回のクラスでの議論が白熱していました。それに比べて、日本の授業はinputする場所になっている傾向があると思います。授業ではしっかり知識を学び、テストで初めて学んだ知識をoutputするような授業なので、アメリカの授業に慣れるまで時間がかかりました。更に私は英語が完璧ではなく、討論も積極的に参加することができずに歯がゆい思いをするばかりでした。討論に少しでも参加したいと思い、毎回の授業をICレコーダで録音し、復習の際に理解できるまで聞き込み、理解度を高めていきました。課題も多く、留学後期は図書館と寮の往復をするような生活を行っていましたが、この留学経験が私をタフに成長させてくれたと思っています。多摩大学でのインターゼミの経験が留学で活きたこともありました。授業でプレゼンテーションの機会があり、日本にいる時はプレゼンの資料を作ることに満足してしまい、相手にどのように伝えるか考えることをしていませんでした。インターゼミの担当の先生方からは、プレゼン資料作成に時間をかけた倍の時間を発表する練習にかけてほしいとアドバイスをいただき、資料作成の時間の倍の時間、発表を練習する時間に使い、いい評価をいただくことができました。

そのような留学経験は私の考えに一般的に言われている正しいと言われていた事が本当に正しいのかと立ち止まって考える余裕と視野の広さを与えてくれました。就職活動の際に、有名な企業に入ることが本当にいい事なのかと考えることができ、将来の目標を達成するにはどうしたらいいのかという事を考えることができました。そのように考えられたことが志望動機を明確にし、就職活動をスムーズに行うことができ、希望の企業に内定をいただくことができた大きな要因になっていると考えています。

留学を終了した今でも、毎日英語力不足を感じるので、今後も留学で身に付けたタフさを活かして英語の勉強に励み、自分の将来の目標を達成できるよう日々努力していきたいと考えています。英語力不足、思考不足など自分の不足している事に気づかせてくれる、多摩大学の学生、先生方の影響を受けられる環境が多摩大学にはあり、その足りない能力を改善するためにはどのような行動、努力が必要かと、考え行動したこの留学、就職活動を含めた4年間は私の人生に大きな意味があった学生生活だったと改めて実感しています。この多摩大学で学んだ事を社会に出ても継続し、少しでも自分の目標達成に向けて日々邁進して行こうと思っています。



韓国人のルームメイトとその友人達との夕食の場面



大学で行われた国際イベントに参加した際他の参加者との集合写真



知り合いをたくさん呼んで行った友人の誕生日パーティー

11月15日(土)、16日(日)に、多摩大学多摩祭が開催されました。

今回、学生会では多摩祭実行委員会の皆さんに密着し、学生会活動に日ごろから協力をしてくれる盟友でもあり、多摩祭開催を影で支えた彼らに、多摩祭を終えた今の赤裸々な想いを語っていただきました。

多摩祭実行委員会 総務部長 小山 明信さん

学園祭の運営を通じて、うまくいくことばかりではなく、迷いや不安に幾度と無く悩まされましたが、本番を無事に終えることができ、辞めることなくやり遂げた達成感が大きく、本当に実行委員をやってよかったなと思います。

大学の教職員や先輩、後輩など、多摩祭にはいろんな人が関わっていて、急な変更等で、自分が振り回され、周りの人たちとうまく情報共有をすることが出来ず苦労しました。

学園祭は学内で数少ない、いろんな経験を積むことができる場所です。まだ入っていない1・2年生も含め、ぜひ、来年の学園祭をやってみてはどうでしょうか。



多摩祭実行委員会の皆さん

多摩祭実行委員会 装飾編集部長 宮崎 遥子さん

装飾編集部として、パンフレット製作に携わり、色々な方にお褒めの言葉をいただけたことが嬉しかったです。

夜遅くまで大学に残って、パンフレット製作や、守衛等の前のアーチ製作など、部署の仕事が特に苦労しましたが、先輩方も手伝ってくださり、ともに学園祭を作り上げることができたことが嬉しかったです。

今年は、天候に恵まれ、沢山の方に会場いただきました。

来年も、沢山の方に楽しんでいただける学園祭をつくっていききたいと思っています。

多摩祭実行委員会 企画部長 森 康樹さん

クイズ大会の企画にあたり、ゼミなどに参加依頼をかけたのですが、思うように参加して下さる団体が集まりませんでした。

自分の中では、企画を絶対に成功させたいという想いがあり、何度もお願いをして、ご参加いただいた4ゼミの皆さんには本当に感謝しています。こういう苦労があっただけに、無事に企画を終えた後に達成感がありました。

僕は、僕らの努力が学園祭の楽しさに比例するものだと思っています。なので、集客のみを成果とするのではなく、来場された方全員に楽しんでいただける学園祭にしていきたいと思っています。

雲雀祭実行委員会 OB 河村 直之さん

今年が多摩祭は幸運にも晴天に恵まれ、声優トークショーやヒーローショーなどの催し物も大勢の来場者で賑わっていて活気ある学園祭でした。

先輩達は今回初めて重要なポジションに立ったということもあり、失敗や苦労が絶えない様子でしたが、必ず学園祭を成功させたいというメンバーの気迫に圧倒され、諦めずに最後までやり遂げることの大切さを改めて感じることができました。

学園祭はまさに問題解決能力を発揮する場だと思います。自分たちが授業で身に着けたマーケティングやIT技術を用いて、より活気ある学園祭を目指して欲しいと思います。

学生会執行部からのお知らせ

多摩大学経営情報学部学生会執行部では、共に多摩大学での学生生活をより良くしたいと考えている仲間を随時募集しております。ご興味のある方は tamagakuseikai@gmail.com までご連絡いただくか、学生会室(テニスコート向かい)までお越し下さい。